

通所介護におけるケアの数値化がもたらすもの 第二報

～主観的 QOL 等スケール分析を通じて～

発表者 中馬 健一(介護福祉士)

共同演者 川上 裕子(看護師) 濱田 ひとみ(准看護師)

【はじめに】

デイサービスはなぶさ(以下、当事業所)では、通所介護の在り方を模索する中でケアの数値化に取り組んできた。昨年度は QOL PCG モラルスケール(以下、主観的 QOL)を始めとした複数のスケール分析において、BMI 値と主観的 QOL との間に有意な相関関係を認めることになった。それから 1 年経過したことから、今回は継続的に当事業所を利用している利用者を中心に各種データの比較・再分析を試みたので、その結果をここに報告する。

【対象と方法】

対象者・期間:デイサービスはなぶさ利用者 18 名【平成 30 年 8 月から令和 1 年 9 月まで継続利用している要介護 1～5 利用者 男性 6 名、女性 12 名 平均要介護 1.9 年齢(76±99)歳】※1

方法:

(1) 平成 30 年 8 月～9 月(以下、1 回目)のスケール評価データと令和 1 年 8 月～9 月(以下、2 回目)評価データを比較分析 ※2 ※3

(2) 1 回目及び 2 回目の BMI 値と主観的 QOL の相関関係を分析

※1 年齢に関しては令和 1 年 9 月 1 日現在。※2 利用者の負担に考慮して複数回に渡り調査を実施した。

※3 スケール評価データの内訳)日常生活動作は Barthel Index(以下 BI)、Functional Independence Measure(以下 FIM)、手段的日常生活動作・活動参加は(IADL 尺度 Lawton&Brody(以下、IADL 尺度)、Frenchay Activities Index(以下、FAI)、QOL は QOL PCG モラルスケール(以下、主観的 QOL)、認知機能を Mini-Mental State Examination(以下、MMSE)

【結果】

(1) MMSE と IADL 尺度を除くスケール評価において平均値は改善した。そこで t 検定を行ったが何れも有意差は認められなかった($p>0.05$)。また、MMSE や IADL 尺度も悪化したとまでは言えない。

(2) BMI 値と主観的 QOL において 1 回目は正の相関($r=0.489276$)、2 回目は弱い正の相関($r=0.289737$)となった。そこで外れ値を除外して再分析を行ったところ、2 回目のみ強い正の相関($r=0.7269$)を認めた。

【考察・まとめ】

継続利用している利用者を対象にスケール評価等の分析を行った結果、数値上は改善していたが統計上の明らかな有意差はなかった。当事業所のケアに対する取り組みは良い方向へ向かっていると思われるが、今回はその要因を断定出来るだけの要素を見出すことは出来なかった。当事業所では、ケアの数値化に取り組む一方で、小規模の特性を活かして食事の準備、後片付け、台拭き等の役割作りやスクワットや立ち上がり訓練、棒体操等を取り入れた 1 日 2 時間の運動メニュー(途中に休憩を挟む)、利用者・家族へ対する予防・健康管理のアプローチ、利用者の悩み相談や家族への介護相談、ケアマネジャーとの密な連携、残存機能を活かしたケア、1 日約 2 時間の個別・集団レク活動による意欲向上や認知機能改善へのアプローチ、個別機能訓練等の充足化を図ってきた。また近い距離感で利用者間交流が行なえる環境を構築している。結果を見る限りは、そうした取り組みによる相乗効果が少なからず影響しているのではないかと推察する。さらに、対象者内の 2 名に関しては通所リハビリを併用しており、何れも BI、FIM を中心に確実な改善を認めていることから、通所リハビリとの併用利用効果が含まれると思われる。これに関しては継続的に取り組みを進めていくことで、さらなる有効性が検証出来るものと考えている。また、BMI 値と主観的 QOL の相関関係については、今回も部分的ではあるが相関関係を認めることになった。しかし、傾向が異なることから一致するには何らかの条件が必要なるのかもしれない。

当事業所が目指す「生き甲斐作りや役割作りを通じて住み慣れた家庭や地域で活動の幅を広げて行ける」ことにおいて、依然として利用者の QOL 向上や心身機能の向上に重点を置くことは必要不可欠であると捉えている。特に主観的 QOL は、その時々を利用者の気持ちの色濃く反映されることから、単に身体機能を高めるだけでは望ましい形には繋がらない為、こうした分析を踏まえた上で、今後も利用者が生き活きと生活を続けられる環境作りに努めていきたい。

〈参考文献〉

QOL って何だろう 医療とケアの生命倫理 小林亜津子 ちくまプリマー新書
長寿社会の余暇開発 瀬沼克彰 世界思想社